

たかすの 「眺め」

毎日見る景色。自分だけが知るとっておきの場所。大切な人との思い出。見慣れすぎて写真に収めるなど考えたこともなかった風景。そんな、普段は自分の中だけにある「眺め」を鷹栖町民20名の方に教えてもらった。読者の方にとっては鷹栖のどこを切り抜いた写真か分かったり分からなかったりするだろう。個人敷地から撮影させていただいた写真も多くあるため、この本では場所の詳細は公表しないこととしたが、鷹栖町にはこんなに綺麗な・面白い、眺めや暮らしがあることの素晴らしさを改めて感じていただければと想いながら取材を続けた。



季節によって庭から見える景色はこんなにも色を変える。田植え前の水を張った田んぼは鏡のように空を映す。手入れされた芝と田んぼの緑がつながる季節は目に心地よい。晴れ渡った日には大雪山が一望できる。融雪剤が撒かれ真っ白な雪が黒く染まれば、もう目の前に春が来ていると感じられる。花を植え、芝を整え、手間暇かけた大好きな庭と、近所の田んぼや数十キロも先の山々が美しく重なり合うような幸運がここにはあった。



絵本のような色の眺め

丁寧に育てられた庭の花々といつの間にか育っていた自然の花々。2つの織り合わさる景色は絵本のように鮮やかだ。

「遠くに山が見えるこの場所が好き。」と彼女は話す。

昔はもっとたくさん家があり、田んぼも今より狭かったそう。その反面、山は動かない。野菜も花も昔と変わらず季節と共に育っていく。景色が変わっても、変わらない何かがあることにほっとするような気持ちを感じた。



町を見渡す丘

6月の草原は瑞々しい。ここは鷹栖町の町を見渡せる丘だ。町を背にすると緑と空だけの景色が続いている。360度どこを見渡しても壮大な風景だが、彼女は町の見える方向が好きと言う。「やっぱり自分たちの暮らす町が見える方がいい」と話す彼女から町やそこで暮らす人への想いを感じた。

この場所は鹿を探しているときに偶然見つけたとのこと。それ以来気分転換したいときに訪れるという。草原越しに見える町を眺める彼女の背中はエネルギーに溢れて見えた。



在り続ける景色

6月下旬は1年で一番日の長い季節だ。太陽の光を存分に浴び緑を深めていく稲や草花は美しい。彼女は生き生きとした緑と青空が見える季節のこの場所が一番好きという。この景色を眺めていると道路がまだ砂利道だった昔、乳母車の車輪がよく砂利の隙間によく挟まっていたことを思い出すそうだ。人生に寄り添うように身近にあった景色だが、その素晴らしさに気が付いたのはほんの最近のこと。慌ただしい日々が落ち着き、ふと目の前を見たときに気が付いたそうだ。刻々と変わる雲の形を見渡すことも、星空を眺めることもできる。特に青空の眺めは「今日はいい日だ」という気持ちを改めて感じさせてくれるという。道が舗装されても木々が多少減っても景色自体は変わらない。それはいつの時代もこの土地に暮らし、手入れをしている人がいるからだろうと彼女は話す。景色も人と共に生きている。そんなことを思い浮かべさせる言葉だった。この景色がずっとあってほしい。

「暮らしそのもの自然そのもの」

黄金の稲をぎゅっと掴み鎌でザクッと刈り取る。稲穂には重みがあり素手で掴むと葉や茎にどこか鋭さを感じた。麻ひもでそれらをまとめ、きつく束ねる。稲の乾燥が進んでも抜け落ちないようにしっかりと結ばなければならない。はさかけをし、自然の力でゆっくりじっくりと乾燥させる。乾燥させている間も茎部分の栄養は稲穂へと送られ続ける。根から切り離された後もなお、稲穂へ栄養を送ろうとする生命力の強さを感じた。稲刈後の田んぼでは、刈り取られた稲の株から新たな緑が芽生えていた。そのような光景を間近で見ると、普段口にするお米も生き物であること、生産者の持つ知識・経験・手間が重なり合いお米ができることを実感した。

「田んぼは暮らしそのもの自然そのもの」と生産者ご夫妻は言う。大変なこともあるが、田んぼは趣味であり楽しみでもあるそうだ。

ご夫妻から田んぼを案内してもらった。その間さまざまな生き物を見つけ教えてくれた。「毎年土は耕され水をはったり抜いたりするにも関わらず生き物はどこからともなくやってくる。」と語る。田んぼは人工物であるが、この言葉を聞いたとき、「自然そのもの」という意味が少し分かった気がした。



「田んぼはいつでも綺麗だ」

9月初旬。稲穂は膨らみ色は深みを増していく。収穫直前の黄金になびく田んぼは気持ちをワクワクさせてくれると彼は語る。田んぼを見ていると、綺麗だな、平和だな、農家っていいなという気持ちになるそうだ。時には心を無にできる場所でもあるそうだ。全てのことがちっぽけに感じられ、心が浄化されていくそうだ。

いつも傍にある田んぼで育ったお米は全国各地へと飛び立ってゆく。お米を食べる方、お店の方、家族、周りの人々みんなが幸せでいてほしいと彼は話す。それを形にするように進んでいく力強さと温かさに溢れた彼の握ってくれるおにぎりは大きくてとびっきり美味しい。



「変わる」は自然

オサラッペ川と黄金色の田んぼが緑の葉と枝越しに見える。ここ嵐山展望台からは鷹栖の街並みを見渡すことができる。「鷹栖の眺めも暮らしも変わった。」展望台への道中、彼はこの町の移り変わる情景を話してくれた。

馬は農耕機へ。農業のパートナーである馬は家族と同じ存在であった。そのため茶の間から馬の顔が見られるくらい馬小屋は近くにあった。

田はどんどん大きくなってゆく。馬に代わり農耕機が普及するとともに田んぼ一枚あたりの面積が大きく整備されていった。現在も続く区画整備。道路から一段高く、もしくは低い位置にある大きな田んぼは昔そこに小さな段々畑があり、それらが一つにまとめられたことを示している。

川は整備された。雨が降ると田んぼの水かさは増していく。その水をオサラッペ川へ流した結果、川が氾濫することが昔よくあった。展望台からは鷹栖の町に寄り添うように流れるオサラッペ川がみえる。それを眺めながらお話を聞いているとこの川なしに鷹栖の歴史を語ることはできないと感じずにはいられなかった。

若いころは展望台付近でよく花見をした。その時にはなかった木や枝が今では風景の額縁のように育っている。

「大きくなったり倒れたり育ったり。変わることは当たり前のこと。そして、変わったと感じることはいいこと」と語る。町の変化を何十年もの間、自分の目で見て、感じる。それは鷹栖という町そのものとともに生きているように思えた。



折り鶴ノ部屋

写真の小さな折り鶴は1辺約3cmの小さな紙からできている。その紙を見ることなく手先の感覚だけで鶴を折る彼女の技は職人級だ。「とにかく紙と遊ぶことが大好き」という彼女の眼は輝いている。そして一番好きな瞬間は、完成した作品を人に渡すときだそう。受け取った人の笑顔を見ることが何よりの幸せであり、生きがいだと言う。沢山の折り紙に囲まれた大好きな眺めの中で、毎日大好きなことができる幸せ。さらにその先にも楽しみがあるという彼女の生き方に憧れる。



しごと場からの眺め

陶器づくりは土を配合し、こねるところから始まる。次に成形し、乾燥させ、釉薬で模様や色を付け、高温で焼き、やっと完成するのだ。のどかな田園風景が見えるこの場所は、施釉前の陶器についた粉をはらう作業場だ。夏のキラキラした日差しの中、1点1点、丁寧に扱われている姿を見ると、陶器にも人間と同じくふるさどがあり、風神窯の陶器のふるさとは鷹栖なんだと感じた。





北野小のにぎやか休み時間

休み時間のチャイムと共に児童たちは外へと飛び出す。さっきまで静かだったグラウンドが一気に賑やかになった。これらの写真は、児童のみなさんにカメラを渡し、北野小から見える好きな眺めを切り取ってもらったものだ。好きな景色はそれぞれ違っていたり一緒だったり様々だ。こどもの時の日常風景を大人になってから見返したらどのように感じるのだろうか。それもまた人それぞれだろうが、ふと思い出したときにこの本をパラパラとめくっていただくと嬉しい。





鷹栖小の雪原冒険隊

1月、ほとんどの児童が室内で休み時間を過ごす中、勢いよく外へ出ていく少年たちがいた。後を付いて行くと雪のどっさり積もったグラウンドを進んでいくではないか。時折、私が付いて来ているか振り向き確認してくれる。優しさにほっこりした。ワイワイ話しながら雪をかき分けて進む姿は、映画『スタンドバイミー』を彷彿とさせた。



見上げる冬の木

深い雪に足を取られながら足跡のまだない雪の上を進んでいく。ゴールは大きな木の下ようだ。到着すると案内人の彼女は「ここに寝転んでみて」と言う。ふかふかの雪に身をゆだねて思いっきり後ろに倒れてみた。目の前には葉を落とした木の枝が広がっていた。

枝たちを眺めているとあることに気付いたようだ。枝はそれぞれ重ならないように伸びている。陽を沢山浴びるためにそうなっているのだろう。その情報をインターネットや書籍で見ると、自分の目で見て肌で感じるのとは感動の度合いが違う気がした。ほんの身近な自然でもよく見ると、その場所で生きていくための形や色が隠れている。それは美しいだけでなく、一見枯れ木であってもものすごい生命力を感じさせるものだった。



未来のワイン農園

1本の白樺。この木を中心として杭が一直線に並んでいる。この杭はブドウの支柱となるもので、木の向こう側に見える雪原は未来のぶどう農園だ。

ぶどうを栽培する彼は、自然の繊細さと奥深さを教えてくれた。9月、収穫時期のぶどうは人間だけでなく小鳥たちも楽しみにしている。小鳥に実を食べられる被害は世界中にあるが、案内していただいた「とわ北斗ヴィンヤード」では小鳥の被害を受けていない。その理由は、ワイン農場上空が鷹やカラスなど大きな鳥の縄張りになっているからだそう。その大きな鳥が縄張りを維持するためには背の高い止まり木が必要だ。美しい森や木が敷地内に点在する農場だからこそ、この絶妙な生態系のバランスが保たれているのだと言う。

ぽつんと立つ1本の白樺も新しい農園を守る止まり木になるかもしれないし、そうはならないかもしれない。人間の目ではそのバランスを見ることができず、想像することしかできない。しかし、その想像力をもった生産者に育てられているぶどうの木々や農場の自然は幸運だと感じた。

庭の中の不思議な森

オンコ（イチイ）の木からシャクナゲの木が生えている。初めて気づいたのはもう10年以上前のこと。どうしてこうなったのかは分からないそうだ。種が風で飛んだのか鳥が運んできたのだらうと考えられるが、こんなにも綺麗に木から生えてくるのは珍しい。

「こんな木は他にはないだろう。作ろうと思っても作ることはできない。」と持ち主は話す。思いもよらない不思議なことは起こるもので、木たちはそれを体現しているようだ。この木たちを根本からのぞき込むと2種類の葉と枝が見える。それらはともに生きている1つの小さな森のようだった。



鷹栖の地上絵

某大企業の地図サービス航空写真にも映る地上絵が鷹栖にはある。驚くことにこの地上絵は手作りなのだ。作者のアイデアと技術がなければ作り得ない地上絵は、通りがかりの人の目も楽しませている。

地上絵の作者をはじめ、鷹栖町には畑や木工、時には家まで一からものを作り上げる方々が多くいらっしゃるように感じる。ものづくりの町と言っても過言ではないのではないだろうか。



花も実も輝く夏のガーデン

太陽に輝く真っ赤で可愛いトマトの実るガーデンに招待いただいた。色とりどりの夏の花々、キラキラ輝くトマトの実、鷹栖の短い夏をぎゅっと詰め込んだような空間だ。ここは新鮮なトマトを頬張りながら歩くことのできる贅沢なガーデン。こんなに身近にトマトがあるのは鷹栖ならではの光景だと思った。

取材日は8月の暑い日だったが、もう秋冬野菜の準備がされていた。わずか数センチのポットには小さな白菜の芽がでており、秋の実りの背景には暑い夏の手間があることを知った。花や野菜には、時間と手間がかかっているからこそ感じられる幸せや美しさがあるのではないか、そんなことを感じるお庭だった。



池も？デッキも！手作りガーデン

気持ちよさそうに泳ぐ金魚はお孫さんのお祭りですくってきたと言う。その金魚たちは池で冬を越したそうだ！その池はなんと全て手作り！！さらに、手作り池は北海道の形をしている！！なんと驚きの多い庭なんだと思った。作ることが大好きで今までコツコツと作り上げてきたそうで、展望台付きログハウスも手作りだ。その傍らに椅子を置き、コーヒーを飲む姿はとても幸せそうに見えた。

力を入れているのはDIYだけでない。バラ園にも手間暇かかっており、数年に一度は土の入れ替えをするそうだ。バラの道は、通るといい香りがし、見ているだけでも心が華やぐ。部屋のインテリアにこだわるように、庭も自分好みに作っていくことで毎日の生活が華やかに楽しくなるんだと感じるお庭だった。



四季の庭

車を走らせていると突如現れる綺麗な花々。隅々まで手の行き届いた庭には、可愛い木工オブジェが飾られている。全て手作りで、季節によって模様替えることもあるそうだ。ハロウィンの季節には鮮やかなオレンジ色の「おもちゃかぼちゃ」が並ぶ。おもちゃではなく本物だ。

季節ごとに色を変えるお庭はご夫婦が長年にわたり作り上げたものだった。今では数えきれないほどある「ラムズイヤー」や芝桜も最初は小さな区画だったそうだ。多年草であっても鷹栖の長く寒い冬を乗り切ることは難しい。そんな中、草花が毎年元気に育つのはきつとご夫婦が毎日のように愛情を込めてお世話をしているからだろうと感じた。

生命力のガーデン

ここは100を超えるであろう種類の植物があるガーデンだ。おしゃれで優雅な花々が溢れる中、こんにゃくやサボイキャベツ、エディブルフラワー（食用花）など珍しい植物が多くあり驚いた。

自然の近くで暮らしていると思わぬ偶然や予想外のことに遭遇するそうだ。別品種のかぼちゃが自然に交配し翌年新たな野菜ができたり、親鳥からは予想できない羽の色をしたひよこが生まれることもある。鳥にも性格があったり、落花生の実だけ器用に食べ尽くす憎いながらも賢いネズミに遭遇したりもするそうだ。「何でも面白がって育ててみるんだ」と話す彼女だからこそ見ることのできる世界だと思った。



芝桜

ラムズイヤー



カンタラモッチの放課後

放課後のカンタラモッチには元気いっぱいの子どもたちが集まる。この日のおやつは手作りフレンチトースト。高学年の子どもたちが皆の分を取り分け配っている姿は頼もしかった。天気の良い日は外でおやつを食べ、各々好きな遊びや宿題をするそうだ。実はこの写真、カンタラモッチに通うこどもたちにシャッターを切ってもらったものだ。のびのび生き生きとして最高だ。



— あとがき —

本書は2020年6月～2021年8月の期間、のべ59組の鷹栖町のみなさんへの取材と、鷹栖に関する様々なことを教えてくださった方々、料理上手な方と私を繋いでくださった方々のご協力により完成しました。「日常」というプライベートなテーマだったにも関わらず快くご協力いただき本当にありがとうございました。

地域おこし協力隊として町のみなさんと関わる中で、鷹栖の日常生活には素晴らしいものが数多くあることに気づきました。特に手料理は鷹栖ならではの、美味しいものばかりでした。「手料理」、そして「日常的な風景」はなかなか表に出るものではありません。しかしそれを知ることで鷹栖町での暮らしはもっと楽しく豊かになるのではないかと思います、本書を発行する運びとなりました。本書が1人でも多くの鷹栖町の方々、鷹栖町に興味・関わりのある方の目に留まり、日常生活に小さな楽しみや幸せをプラスするアイデアブックのような存在になると嬉しいです。

地域おこし協力隊 林 歩実